平成 30 年度　姉妹校等留学プログラム

横浜市立金沢高等学校サンディエゴ国際交流プログラム

(1)学校・団体名/種類（派遣高校生の人数）

横浜市立金沢高等学校/海外研修（２人）

(2)渡航先

国／都市：米国／サンディエゴ市

外国の高校：ミッションベイハイスクール

(3)期間

平成 31 年３月 16 日～平成 31 年３月 22 日（７日間）

(4)プログラムの趣旨・目的

高校生が海外へ踏み出すきっかけとして、姉妹校であるサンディエゴ市のミッションベイハイスクールで現地の高校生活を体験し、生徒同士が理解を深め、グローバルな視点を持てるような交流をする。また、国際感覚豊かな人材として活躍するための素養を養う。

(5)活動内容

〇ミッションベイハイスクールを中心とした、近隣区域の小学校、中学校、高校の生徒との交流を深める。

〇ホームステイをすることで、異文化に触れ、現地の日常生活を経験する。

〇横浜市の姉妹都市であるサンディエゴの歴史や地理、文化に触れる。

(6)実績・成果

〇派遣高校生 ＴＳさん

【研究】アメリカと日本の学校教育の違い

テーマ設定の理由

近頃、様々な社会問題が世間を騒がせているが、とりわけ教育に関するニュースが多いと感じる。部活動の過熱、受験戦争など挙げたらキリがない。自分の将来の夢は教員になることであるが、このようなニュースを見ていると「日本の教育は果たして大丈夫なのだろうか」と不安さえ覚える。そんな中サンディエゴ国際交流プログラムでは､姉妹校であるミッションベイハイスクール(以下 MBHS)の学校の授業を一緒に受けたり、大学を見学したりする機会があると知った。日本とアメリカの教育に何か違いはあるのだろうか？あるいは日本やアメリカの教育の特徴も見えてくるのではないかと考え、アメリカと日本の学校の違いについて調べたいと思い、本テーマを設定した。また、本レポートでは勉強に関する事柄に絞って調べていく。

事前に調べた結果

- カリフォルニア州では小学校五年、中学校三年、高校四年の義務教育となっていて、さらに大学で四年間学ぶことができるようになっている。
- MBHS では日本と同じような教科を学んでいる。(英、数、理、社、外国語、美、体、特別活動などの教科)
- 毎春州ごとに統一学力試験が行われ、この結果が学校に対する評価や生徒の評価、指導に影響される。
- 英語と数学の卒業試験への合格、単位の修得（アメリカの高校は単位制)、最低基準以上の成績、ボランティア活動への参加（一部の学区）をもって義務教育卒業となる。

といったことが分かった。日本では国が学習指導要領を作成し、指導内容や方針を作っているが、アメリカでは地方自治重視の考えから、それだけ州の権限が強いことが分かる。

実際に授業を受けてみて

私は、理科（海のサイエンス)、数学（ベクトル)、英語（長文読解)、世界史（第二次世界大戦でのカナダ)、コンピュータサイエンスの授業を現地の生徒と受けた。感想は、「日本と全く違う」というものである。何がどう違ったのかを表にしてまとめた。

	市立金沢高校	MBHS	コメント・感想など
授業時間	基本的に 50 分 一日 6~7 時間	およそ 90 分 一日 4 時間	1 つの授業あたり日本のおよそ二倍あったのでとても長く感じた
科目	英、国、数、理、社 家庭、保健体育、 総合	日本と大よそ 変わらない	海のサイエンスやコンピュータサイエンスなど、日本では無いような授業もあった
持ち物	教科書や資料集、 プリントなどが必要	教科書を使っている場面は見なかった	多くの教科でレポートを書いたり調べものをするためにパソコンを使っていた
授業内の生徒数	30 人以上が同時に受ける	1 つの授業当たり およそ 20 人	教室も日本のものより 小さかった
生徒と先生の様子	先生の話をひたすら生徒が聞くことが多い	生徒と先生の距離が日本に比べて近く感じた	生徒も先生に積極的に質問していたし、先生が生徒にジョークを言うこともあった
授業の雰囲気	静かに真剣に 受けている	先生が話す時間が短い。また、全体的に緩かった	先生も授業中に何か飲食していたし、生徒も携帯電話を触ったり、他の教科の課題をやったりしていた
授業内容	教科にもよるが、 知識を覚えることが多く感じる	調べさせたり考えさせたりする課題が多かった	例えば英語では、「文章を読んで論評せよ」といった課題だった 下の写真参照
テスト	授業で教えられた知識を問われることが多い。	記述問題が ほとんどで、表の穴埋めが少しあった（理科）	問題は 15～20 で、43 点満点だった 難しそうで時間をかけて勉強しないと点数が取れなさそうに感じた

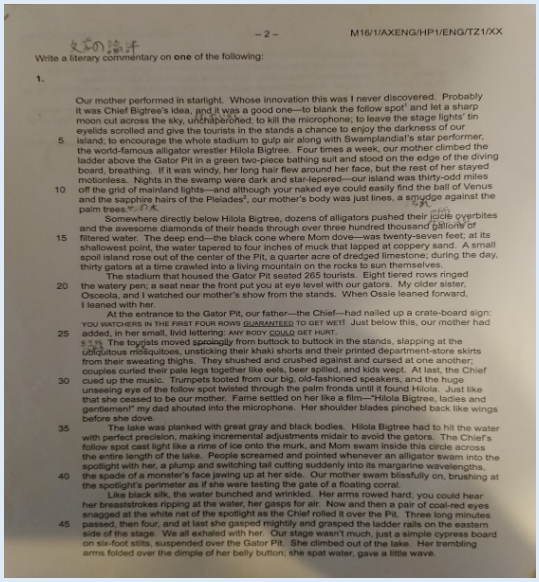
事前調査と実際に受けてみての感想

自分が思っていた以上に授業や教育の違いがあって驚いた。ただ、そこにはアメリカの**「自由な気風」**というところが色濃く出ていると感じた。日本とアメリカの学校教育のよいところを個人的な視点からまとめるなら…

日本…50 分のサイクルで授業が回り、アメリカの授業にくらべて集中力を保ちやすい。また、勉強していることが大学受験に直結した内容なので、受験勉強には取り組みやすいのかもしれないと感じた。

アメリカ…今後社会に出た時に必要であろう、思考力や判断力を身に付けやすいカリキュラムとなっていた。また、先生対生徒の割合が日本に比べて小さく、安心感のようなものを感じながら受けることができた。

どちらの国の教育が圧倒的に良いかは何とも言えないし、受ける人によって違うと思う。ただ、日本もアメリカのような考えさせたり調べさせたりする学習を増やしてもいいのではないかと思った。自分は考えたり調べたりすることは決して嫌いではないので、そのような活動を通してなら苦手教科にも楽しく取り組める気がしたからだ。実際にアメリカの生徒たちはこのような活動に対して、楽しそうに取り組んでいた。将来自分が教師になれたなら、このように生徒が楽しんで取り組めるような授業や活動をしていきたいと思った。そして何より、MBHS のような生徒との距離が近く、温かみのある先生にもなりたいと強く思った。



– 2 –　M16/1/AXENG/HP1/ENG/TZ1/XX

文学の論評

Write a literary commentary on **one** of the following:

1.

Our mother performed in starlight. Whose innovation this was I never discovered. Probably it was Chief Bigtree's idea, and it was a good one—to blank the follow spot[1] and let a sharp moon cut across the sky, unchaperoned; to kill the microphone; to leave the stage lights' tin eyelids scrolled and give the tourists in the stands a chance to enjoy the darkness of our island; to encourage the whole stadium to gulp air along with Swamplandia!'s star performer, the world-famous alligator wrestler Hilola Bigtree. Four times a week, our mother climbed the ladder above the Gator Pit in a green two-piece bathing suit and stood on the edge of the diving board, breathing. If it was windy, her long hair flew around her face, but the rest of her stayed motionless. Nights in the swamp were dark and star-lepered—our island was thirty-odd miles off the grid of mainland lights—and although your naked eye could easily find the ball of Venus and the sapphire hairs of the Pleiades[2], our mother's body was just lines, a smudge against the palm trees.

Somewhere directly below Hilola Bigtree, dozens of alligators pushed their icicle overbites and the awesome diamonds of their heads through over three hundred thousand gallons of filtered water. The deep end—the black cone where Mom dove—was twenty-seven feet; at its shallowest point, the water tapered to four inches of muck that lapped at coppery sand. A small spoil island rose out of the center of the Pit, a quarter acre of dredged limestone; during the day, thirty gators at a time crawled into a living mountain on the rocks to sun themselves.

The stadium that housed the Gator Pit seated 265 tourists. Eight tiered rows ringed the watery pen; a seat near the front put you at eye level with our gators. My older sister, Osceola, and I watched our mother's show from the stands. When Ossie leaned forward, I leaned with her.

At the entrance to the Gator Pit, our father—the Chief—had nailed up a crate-board sign: YOU WATCHERS IN THE FIRST FOUR ROWS GUARANTEED TO GET WET! Just below this, our mother had added, in her small, livid lettering: ANY BODY COULD GET HURT.

The tourists moved sprongily from buttock to buttock in the stands, slapping at the ubiquitous mosquitoes, unsticking their khaki shorts and their printed department-store skirts from their sweating thighs. They shushed and crushed against and cursed at one another; couples curled their pale legs together like eels, beer spilled, and kids wept. At last, the Chief cued up the music. Trumpets tooted from our big, old-fashioned speakers, and the huge unseeing eye of the follow spot twisted through the palm fronds until it found Hilola. Just like that she ceased to be our mother. Fame settled on her like a film—"Hilola Bigtree, ladies and gentlemen!" my dad shouted into the microphone. Her shoulder blades pinched back like wings before she dove.

The lake was planked with great gray and black bodies. Hilola Bigtree had to hit the water with perfect precision, making incremental adjustments midair to avoid the gators. The Chief's follow spot cast light like a rime of ice onto the muck, and Mom swam inside this circle across the entire length of the lake. People screamed and pointed whenever an alligator swam into the spotlight with her, a plump and switching tail cutting suddenly into its margarine wavelengths, the spade of a monster's face jawing up at her side. Our mother swam blissfully on, brushing at the spotlight's perimeter as if she were testing the gate of a floating corral.

Like black silk, the water bunched and wrinkled. Her arms rowed hard; you could hear her breaststrokes ripping at the water, her gasps for air. Now and then a pair of coal-red eyes snagged at the white net of the spotlight as the Chief rolled it over the Pit. Three long minutes passed, then four, and at last she gasped mightily and grasped the ladder rails on the eastern side of the stage. We all exhaled with her. Our stage wasn't much, just a simple cypress board on six-foot stilts, suspended over the Gator Pit. She climbed out of the lake. Her trembling arms folded over the dimple of her belly button; she spat water, gave a little wave.

実際に英語の授業で配られたプリントの一部。文章は裏にも続き 55 行に及ぶ膨大な量だった。アメリカの生徒はこれを読み切って論評を書くということを 90 分で終わらせていた。

【感想】サンディエゴに行く意義

手元にこのプログラムへの選考申込用紙があったので読み返してみた。

志望理由「私は将来教師になろうと思っています。その為には幅広い知識や経験を身に付ける必要があると感じています。(中略)自分の英語がどれだけ通用するかを知り、他国の教育を体験することで、自分の将来に生かしたいと考えています。以上のことから私は交流プログラムへの参加を希望します。」

約半年前に自分が書いたものだが、このときの目標を私はサンディエゴでしっかりと達成できたと思う。なぜなら英語を通じて様々な活動に積極的に取り組めたからだ。想像以上に充実した一週間にすることができた。

第一に、英語力が伸びたとまでは言わないが、現在の立ち位置が実感できた。話すのは自由に出来たが、聞く方に問題があることが分かった。ホストファミリーや現地の学生と話しても、大体の意味までは掴めても細かい点までは分からないことがほとんどだった。その原因としては、①知らない単語が多かった②ネイティブの話すスピードが想像以上に速かった ということが挙げられる。語彙力は普段の学習で少しずつ伸ばせるが、英語を聞く耳はそれだけでは慣れないと思う。例えば、教科書の文章のリスニングをもっと速いスピードで聞いてみることをしてみたい。

第二に、日本人とアメリカ人、相互の長所と短所を知ることができた。一般に日本人はシャイでアメリカ人は明るいと言われるが、本当にその通りだった。ミッションベイハイスクールのトイレを使った際に現地の学生に「日本とアメリカの学校は何か違う？」と英語で声を掛けられたのには驚いた。(ちなみに、そのトイレがゴミで溢れかえっていて、マナーという意味では日本の方がいいと感じた)授業に参加した際にも、日本では目にしたことがないほど生徒が積極的に質問していた。他人を思いやる心は日本人ならではで、もちろんいいことである。ただ、それが過剰なあまり、自分を押しつぶしてしまっているようにも感じた。私自身も積極的な性格であると思っていたが、さらに積極的な姿勢が必要だと思う。

このように、たった一週間ではあったが様々なことを経験して多くのことを学ぶことができた。帰ってきてからの日も浅く、正直これから何にどう生かせるかは全く分からない。しかし、今後の普段の生活の中で、あるいは進学や就職を考える中で、サンディエゴで学べた何かが生かせるかもしれない。

4 月には逆にお迎えする側になる。私たちと同様に多くの発見ができるよう、できることはしっかりサポートしたい。

〇派遣高校生 WSさん

今回の研修で、積極性・度胸・友情・勇気など本当にたくさんの力が身についたと思う。特に、ホームステイは初めての経験で初日はとても不安だった。しかし、夕食を食べ終わる頃には慣れ、家族に溶け込むことが出来た。分かりやすいようにゆっくり話してくれたため、とても会話がしやすかった。

私は先輩と一緒にホームステイだったので、初日はかなり先輩に頼ってしまっていた。しかし、2日目に先輩が体調を崩してしまい、それをホストファミリーに伝えたり、電話を貸してもらったりと、「自分がなんとかしなきゃ」という状況を体験した。

次の日は１人で学校へ行き、ホストファミリーと私だけで会話する時間が増えた。始めは不安でたまらなかったが、外国で不安を体験して乗り越えることが出来たからこそ、度胸が身についたと思う。いつも私は、思っているだけで行動に移せなかったり、誰かが行動してくれるのを待って、それに急いでついていったりという感じだった。この日をきっかけに、私は変わることが出来たと思う。学校で行動するとき、2日目までは日本人同士で固まってしまいがちだったが、その日以降、自分１人で積極的にアメリカ人のグループの中に入っていけるようになった。また、授業体験の際スペイン語の授業が自習だったので、皆喋っていたが、アメリカ人同士の速いスピードの会話をずっと聞いていたため、だんだん聞き取れるようになっていった。初日は何て言っているか分からず聞き返すことが多かったが、最終日には聞き返すことがだいぶ減っていた。生の英語に触れ、リスニング能力がだいぶ身についたと思う。

そして、3日目からホームステイ先にブラジル人の21歳の男性もホームステイメンバーとして加わった。

お互いの国のことなどを、夕食を食べながらみんなで話すことが出来た。ホストファミリーはスペイン語を話すため、スペイン語・ポルトガル語・日本語でそれぞれ物の言い方を話したりすることが出来、とても楽しく貴重な体験だった。それぞれ母国語は違うのに、英語を通して繋がれることはとても素敵なことだと思った。だからこそ、もっと英語の勉強を頑張りたい。また、相手が自分の言語で頑張って話してくれた時、とても嬉しかった。

だから私は、最終日にホストファミリーに感謝を伝える際、スペイン語で話すことに決めた。ミッションベイハイスクールの友人にスペイン語の表現を教えてもらい、練習した。日本語で考えた伝えたいことを英語にして友人に伝え、さらにそれをスペイン語に直してもらう、というかなり難しいことだったが、言語の素晴らしさや奥深さを知ることが出来た。そして、ホストファミリーに伝えるとちゃんと伝わり、とても喜んでもらえた。この時の喜びが、ずっと忘れられない。これらを通して、言語への興味がかなり深まった。ボディランゲージでも伝わることがあるが、思っていることをそのまま言葉にして伝えられるようになりたい。そして、大学やその先の将来のビジョンが以前より明確になった。この研修を通して、英語力や文化の違いはもちろんのこと、目標という１番大切なことを手に入れられたと思っている。

研究テーマ　：　食文化の違い

私はアメリカの食文化について調べた。このテーマを選んだ理由は、「カリフォルニアロール」など、日本の料理が外国でアレンジされているのと同じように、私たちが今当たり前のように食べている洋食は本場のもとのどう違うのか調べてみたいと思ったからだ。また、スーパーなどで売られている食材の種類等も調べてみたいと思った。そのため、アメリカの食文化の違いについて、次の４つの通りまとめる。

１．ホストファミリーの家での食事
２．売られている食品について
３．学生の食事
４．まとめ

私は、ファストフード等は日本で食べているものよりもサイズがかなり大きく、味が濃いのではないかと予想した。また、私は以前タイに住んでいたが、タイ人は自炊をしない文化だったので、アメリカもそうではないかと予想した。

１．ホストファミリーの家での食事

〔1 日目〕 昼:チキン、ポテトサラダ 夜:ピザ、サラダ、ケーキ 到着した日の夕食はピザで、生地から家族全員で作った。日本のピザよりもチーズの量がとても多く、味も濃かったが、とても美味しかった。
〔2 日目〕 朝:トースト、スクランブルエッグ 昼:ピザ、クッキー（サンディエゴハイスクールで用意されたもの） 夜:鶏肉のトマト煮、ライス
〔3 日目〕 朝:ケサディーヤ（メキシコ料理。トルティーヤにチーズを入れたもの） 昼:お弁当（サンドウィッチ、りんご、オレンジ、シリアルバー） 夜:チリコンカン、肉、ライス、フライドプランテン（甘くないバナナのようなもの）
〔4 日目〕 昼:3 日目と同じ 夜:ステーキ、ライス アメリカにいる間は米は食べられないと思っていたが、2、3、4 日目の夕食の主食は米だった。主菜とご飯という形が基本で、カリフォルニア産の米はタイ米をもっと細くしたような感じだった。味付けは濃すぎず、日本人にも食べやすい味だった。
〔5 日目〕 朝:オートミール、ゆで卵、りんご 昼:ハンバーガー、タコス（ミッションベイハイスクールで用意されたもの） 夜:ハンバーガー、ケーキ 最終日の夕食はハンバーガーだったが、予想とは違い、日本で食べているものとサイズは変わらなかった。 味も、日本のものより少し濃い程度で大きな差は無かった。
〔6 日目〕 朝:トースト、ハッシュドポテトにチーズと卵を混ぜて焼いたもの、みかん

～分かったこと～

私のホストファミリーはアメリカ人ではなく、お父さんがドミニカ共和国、お母さんがコロンビアの方だった。

毎日主食はパンだと思っていたのだが、1日目と5日目のみ主食がパンだった。1日目はアメリカ人の来客が来ていて一緒に夕食を食べた。
また、5日目はルームメイトの誕生日で、さらにホストシスターの友人も来ていた。
日本の一般的な家庭では主食は米で、パーティーの日や来客が来た時などはピザを取ったりするが、彼らの家もそうなのかもしれない。

また、アメリカ人の来客があった日のみ味付けがとても濃かった。
その日のデザートにケーキを食べたのだが、とても甘くて全部は食べられなかった。ホストファミリーも少ししか食べておらず、喜んでたくさん食べていたのはアメリカ人の来客のみだった。
2日目以降の夕食が普段彼らが食べているものなら、1日目だけ大きく味が違ったので、客の口に合わせた料理を用意したようだ。
これは、日本の「おもてなし」と同じだと思った。
そして、アメリカ人は味の濃いもの、甘いものを好むことや、コロンビア、ドミニカ共和国などの南米の国と日本人の食の好みは似ていることも分かった。

２．売られている食品について

～日本との違い～
スーパーに行く機会が多かったのだが、ジュースや牛乳が洗剤のような入れ物に入っており、驚いた。
野菜や果物は基本的には日本と変わらなかったが、りんごのサイズが日本のものよりだいぶ小さく、ビニール袋に6個ずつくらい入ったものが売られていた。
また、お菓子の種類がとても多く、どこのスーパーに行っても1番広いのはお菓子売り場だった。また、日本のお菓子は箱の中に小包装の袋で入っていて、食べきれなくても保存しておくことが出来るが、アメリカのものは開けるといきなりお菓子が入っているうえに量が多かった。日本人からしたら量が多いが、アメリカ人からすると食べきりサイズなのかもしれない。また、チャック付きのお菓子はほとんど見られなかった。
そう考えると、日本のお菓子はかなり考えて作られていることが分かった。

～アメリカの変わったフレーバー～
日本でもお馴染みのオレオも様々なフレーバーがあり、オレオだけで棚の3分の1が埋め尽くされていた。
ピーナッツバター味やチーズ味、さらにはレッドベルベッドケーキ味の赤いオレオもあった。
１つ購入しようと思い見ていたら、あるフレーバーが目にとまった。
「バースデーケーキ味」だ。
パッケージには、白いケーキに青いクリームとカラフルなスプリンクルがデコレーションされているイラストがプリントされていた。
なぜバースデーケーキ？普通のケーキ味ではダメなのだろうか。
購入して食べてみると、白いクリームの中にスプリンクルが混ぜ込まれているカラフルなクリームだった。
味は日本のよりかなり甘かった。
他にも、バースデーケーキ味のガムやキャンディも見かけた。

どうやらアメリカでは人気のフレーバーらしい。

そして後日、ショッピングモールのケーキ売り場を何気なく見ていたら、なんとあのパッケージイラストそのままのケーキが売られていた。

さらに、サンディエゴハイスクールの友達が、お父さんのバースデーケーキを作った写真をSNSに載せていたが、それも同じように白いケーキに青いクリームで文字が書いてあるケーキだった。

どうやらアメリカでは、日本のように好きなケーキにろうそくを刺して「バースデーケーキ」にするのではなく、「バースデーケーキ」というものがちゃんと存在しているようだ。

これにはとても驚いた。

ちなみにホストファミリーの家で食べたバースデーケーキは日本と同じく、買ってきたケーキに自分たちでろうそくを刺してバースデーケーキにした。

やはり日本と南米の食文化は似ているようだ。

3．学生の食事

今回、ミッションベイハイスクールで3日間過ごし、生徒と交流する時間も多くあったので、普段の食事について聞くことが出来た。ミッションベイハイスクールにも学食や売店があったため、ほとんどの生徒がそこを利用するのかと思っていたが、意外に、弁当を持参している生徒が多かった。

私もホストファミリーに弁当を持たせてもらったのだが、サンドウィッチ、フルーツ、シリアルバーが入っていた。どの家の生徒も、その組み合わせがほとんどだった。

学食には、チキンやハンバーガー、ライスクリスピー、ピザなどがあった。

休み時間に、向こうの生徒3人と、4人で会話していたのだが、金高の学食は美味しいのか聞かれた。美味しいと答えると、「ここの学食は美味しくないよ」と言われ、隣にいた他の子までもが、「学食の話をしないでくれよ」と顔をしかめるほどだった。金高の学食が人気で、いつも混んでいることを伝えるととても驚かれた。どうやらミッションベイハイスクールでは、弁当を用意できなかった時に仕方なく学食を利用するものらしい。

4．まとめ

実際にアメリカに行ってみて、予想とは違うことや新しい発見がたくさんあった。

行く前は、アメリカ人は皆とにかく味の濃いものを好み、自炊はしないものだと思っていたが、実際は濃い味付けが苦手な方も多くいたし、好みはかなりバラバラだった。

話していくなかで、中華系や南米系の方は日本人と味の好みが近い傾向があった。

これは、様々な民族の人々が暮らすサンディエゴだからこそ発見できたことだと思う。

もともと、アメリカと日本の比較をするつもりだったが、それ以外にもたくさんの他の国のことも知ることが出来たので、この経験を生かして、１つの視点で物事を考えるのではなく、常に広い視点で考えられるようにしたい。